

教育格差の解消目指す



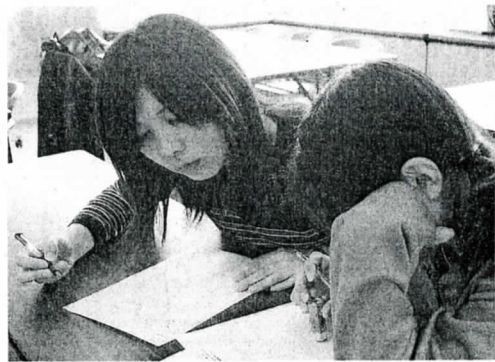
教育ルネサンス

茨城大学の学生が、経済的な理由などで学習塾に通えない水戸市の小中学生に学習支援を行っている。県内では学校側が主体的に実施するケースはあるが、学生が学習場所や講師の確保などすべての環境を整えるのは珍しい。学校関係者からも歓迎の声が上がっている。

茨大生小中学生に学習支援

活動は清山玲教授（労働経済・社会政策）のゼミに所属する学生が昨春、貧困につながる教育格差の解消を目指して始めた。当初は進学の際に活用できる奨学金制度の情報をインターネットで伝えようと考えていた。だが、市内で開かれた地域問題を考える会議をきっかけに、ある地区の中学校で一人親世帯が全校生徒の2割近くを占

中学生に数学を教える茨城大の女子学生（16日、水戸市で）



めていることが分かり、その地区で直接支援に乗り出した。

最初の活動は昨年8月。学習場所は市内の不動産会社と交渉して、複合商業施設の一室を無償で借り受けた。講師はゼミに所属する学生23人が担当、県内のNPO法人から先行事例を学び、10日間の学習の場を提供した。今月16日から始まった2回目の学習会は、高校受

験を意識し、中学生を対象を限定。県教育委員会に「つまずき」やすい学習のポイントを教わり、期間も13日間に拡大した。

学習会は平日は午後4時〜7時半、土日は午前9時〜午後5時に開く。3、4人の学生が子供たちの疑問や質問に答える姿に、見学に訪れた市立中学校の男性教諭(52)は「教育格差が広がっている現状で、学校以外でも勉強ができる活動はありがたい。ずっと続いてほしい」と期待した。水戸市教委は「年齢が近い学生が指導者ということので、子供も勉強に取り組みやすい」と評価する。

ゼミ長の今野敬太さん(22)によると、市内の別の地区からも学習会に参加したいという申し込みがあるという。講師となる学生の確保を始め、活動を続けるための組織や態勢作りに課題は残るが、今野さんは「必要としてくれている生徒や保護者はいらぬ。今後も続けていければ」と話している。